

「心の救助隊」



関美濃保護区保護司会
会長 宮西 公良

【「チエンソーを持ってヘリポートまで来てくれ」一本の電話がかかってきて、じいちゃんは身支度をしました。チエンソーを持ち、靴にアイゼンをつけて、救助用のヘルメットをかぶりました…】

法務大臣賞・最優秀賞を受けた高山市立栃尾小学校六年 内野匠君の『心の救助隊』という作文の書き出しです。彼のおじいさんは北飛山岳救助隊の隊長なのです。冬山で遭難者が出た場合、視界不良でヘリコプターが使えない時は、吹雪の中を三十人もの救助隊が、歩き回って探すそうです。自分が危険を冒してまで、それも見知らぬ人を助けに行こうとする、おじいさんの気持ちが変わらず「なんでそこまでして助けるの？」と尋ねる彼に、おじいさんは遭難者のポケットにあった一枚のメモを見せます。【月曜から遭難して、今日は水曜。お母さん、ごめんさい…。助かるよ。うがんばるけど、雨と寒さがとてもつらい。今日は元氣だけど、この先わからない…。もしものときは、おかあさん、ありがとう。あなたの息子で

良かった。】だから…だから一刻でも早く救助にむかわなければならないという、おじいさん。内野君の文をそのまま引用させてもらいます。【救助隊が命がけでも、救える命は本当に少いで、救助が間に合わず、冷たくなった体を背負って、じいちゃんは何度も山から下りてきたそうです。じいちゃんの助けようとした命は、重かっただろうなあ。今、日本では、信じられないような事件が毎日のように起きています。家族や、何の罪もない人の命を、意味もないうばうなんて、あまりにも人の命が軽すぎます。都会で、人がたくさんいるのに、まるで迷子になって遭難しているように感じます。心の遭難のようです。山には山の救助隊があるように、心にも救助隊が必要なのかもしれません。山の救助隊は専門家しかなれませんが、心の救助隊は、いつでも、だれでも、どこでもなれると思います。】そして彼は次のように教えてくれています。【僕たちの通う栃尾小学校ではへこころをつなぐを合言葉に、相手の目を見て話を聞くこと、人につながって話すことを大切にしてい

います。(中略)女子には少し照れくさかったけど、一日にひと声かけることを続けていたら、楽に話せるようになってきました。ただそれだけのことで、心はつながっていくようです。全校九十三人の小さな学校ですが、だからこそ、このことをずっと続けて、きずなを深めていきたいです。そうすれば、心の遭難者はうまれなはずです。ぼくも大人になったら、じいちゃんのように、救助隊に入りたいと思うけど、心の救助隊でもありたいと思います。(後略)

内野君は私たちに教えてくれています。社会のルールに反して犯罪を犯してしまった人達を更生させる【更生保護】という重い看板に悩むことなく、今、自分にできる身近なことを第一歩として、取り組んでいく事の大切さを…。また、更生保護女性会のみなさんが活動されている、プレイルームで若いお母さんに声がけをすること。園児に自分の声で絵本を読んであげ、心をつないだりすること。社会貢献活動という厳めしい名の下ではあるけれど、保育園や施設での草引きや窓ガラス拭きのお手伝い。この行動こそ【犯罪予防】として、私たちも胸の張れる【心の救助隊】の一員としての活動ではないでしょうか？

十二歳の少年に改めて教えられ、感銘を受けた作文を紹介させていただきます。